

菅政権と政治言語力

——言葉はどのように政治を動かしたのか？——

東 照 二

要旨

人文社会系、自然科学系を問わず、最近、特に注目を集めてきているのが、多様性に注目し、幅広く人間性そのものを追求し、多文化理解を広めていく、そして個人的、社会的な価値観を深めていくという、多言語・多文化的・俯瞰的なアプローチである。そして、今後ますます、広まっていく「多文化共生社会」では、一国だけに通用する、限られた政治家の発言力を、もっと広範な枠組みで見直していくことも必要になるであろう。

その際、政治家の言語力、特に、国家的危機といってもいいような新型コロナ感染の状況にある日本では、どのように政治が語られている（いた）のであろうか。かつて、江戸時代の「役人」という言葉には、「上司の命令」であるからとして、明快な答えを回避する傾向が特に強かったと言われている。この明確な答えを「避ける」というスタイルは、限られた政治家のものというよりは、それを超えて、どうも日本の伝統文化の一部と言ってもいいようだ。そしてこの「責任能力の回避」に優れた人が、現在の日本においても、多くの政治家、あるいは一国のリーダーの資質になってはいないだろうか。この観点から、ここでは2020年9月から1年間、日本の政治リーダーであった菅義偉総理を中心にして、言語の特徴、変遷について考えて見ることにする。さらに、政治言語学の視点として、社会言語学者のタネンの主張などを紹介しながら、政治家の言葉を概括してみることにしよう。

キーワード：言語、共感、情緒、情報、スピーチ・スタイル

目次

1. はじめに
2. 菅総理の言語
 - 2.1. 「仮定のこと」
 - 2.2. ぶら下がり会見
3. スピーチ・スタイル
 - 3.1. ラポートとリポート
 - 3.2. ジェシー・ジャクソン
4. 結論
 - 4.1. 役人
 - 4.2. ウチとソト

1. はじめに

ものを「食」という行為は、間違いなく全ての人間、動物、植物が日常的に経験して来たものであり、それを複眼的に研究することは、極めて望ましい学際的分野の一つであると言える。そして単なる需要、供給という面だけでなく、文化的な要素、例えば、食物の提案の仕方、香り、色、味覚、個人的好みといった側面も、社会、個人にとっ

て大きな要素になってくる。実際、例えば、匂い、香りを表す言葉を、どう香りそのものに関係のない言葉で表現するかということにも言語学者の間では興味の対象となっているようだ。例をあげると、「バラのような香り」と言っても、それは「バラ」という視覚を想定して、香りに結びつけているにすぎないもので、味覚を何らかの五感（感触、触覚など）で代用しているわけだ。つまり、香りを表す「香り専用の言葉」がない、ということになる（Ackerman 1995, 東 2017）。つまり、香りは「ことばにできない感覚」（mute sense）ということになる。それでは、実際、私たちはどうやって香りを表現しようとしているのだろうか。これは「共感覚」という他者との関係に繋がる分野だが、こういった人とのつながり、つまりコミュニケーションがますます、重要になって来ているのが昨今の現状であろう。そこで、ここでは文化的な側面、特に他者とのコミュニケーションという分野に集中して日本の政治を考えてみよう。

日本の政治で驚くべきことは、菅義偉総理が、2021年9月3日に突然、自民党の総裁選挙に立候補しないことを表明したという事実だ。すぐ直前までは、総裁選挙に出馬することを明言していた総理である。これは、事実上の総理辞任であり、1年間続行した菅総理の政権の終わりである。自民党では、総裁選挙が行われ、2021年9月30日に新しい総理として岸田文雄前政務調査会長（2012-2017年の間、外務大臣）が選出された。党内の各派閥もほとんどが自主投票ということで、混沌とした選挙であった。結果、岸田内閣の誕生は、今までにはなかった新しい自民党、そして日本を変えることを期待した選ばれた、心機一転の政治家が生まれた、ということにもなる。かつては、「不言実行」という言葉があったが、今は、「不言」ではなく、「説明責任」が強く問われる時代だ。今後、様々な駆け引きが党内で行われるだろうが、「聞く力」を取り柄とする岸田総理が、どこまで日本の未来を引っ張っていけるのか、大いに期待したいところである（産経新聞 2021d、日本経済新聞 2021b、西日本新聞 b、京都新聞 a、読売新聞 c、朝日新聞 2021h、i、毎日新聞 c など）。

振り返って、この1年間（2020年9月から2021年9月まで）の菅総理の政権を取り上げてみると、2020年9月に新総理・首相に就任して以来、当初の支持率の高さもあり、かなり期待された国家的リーダーだと言えた。しかし、主に世界的規模にまで広まった、感染爆発（パンデミック）とまで言われる「新型コロナウイルス」への国家的な対策、その他などで大きな痛手を受けてしまった。支持率も3割程度にまで落ち込み、様々な政策、人事などについて、強力な支持を国民、所属党（自民党）から得られることなく、最後は、総裁選挙を辞退することになってしまった（日本経済新聞 2021a）。また、偶然だが、オリンピックが開催された年には首相は辞任して来たというジンクスがあり、実際過去3回のオリンピックでは、池田勇人、佐藤栄作、橋本龍太郎が辞任している（毎日新聞 a）。そして2022年、4回目のオリンピックでは菅総理が辞任したということになる。

政治学者の御厨貴氏によると、国民に「説明しない政治」は、すでに第二次安倍政権から始まっていたという（朝日新聞 e）。どんな問題やスキャンダルがあっても、国政選挙で毎回勝てば、国会でもメディアでも「説明はしなくてよい」のどとなってきたと、御厨貴氏は指摘している。特に、自民党内でも若手、中堅議員から、菅総理以外の政治家を総理に推したいという意見の強まりも広がっていた。

さて、それではこういった事態に至るまでの、菅総理辞任に至る大きな要因はどこにあったのだろうか。ここでは、政策、外交などを含めて、特に政治家が日頃から使う言語に注目し、その「言語仕様の実態」という点にフォーカスしながら、考えていくことにしよう。「政治」と「言語」は、実のところ、私たちが普通考える以上に、かなり密接にお互いに関連しているという見解も幅広く、様々な学問分野で語られるようになっている（例えば、東 2006、竹中 2006、フェルドマン 2006、Maynard 1994、Lim 2008、Ikeda 2009、Lakoff 2009、Ott and Dickenson 2019 など）。菅総理は、一体、どのようにして言葉を使って政治を動かして来たのだろうか。菅総理の「政治」と「言語」を中心にすえて、新型コロナウイルスと政治言語力を考えてみよう。

新型コロナ感染患者が急増している中、2021年8月3日に、差し迫る「医療危機」に対応するため、政府は感染者について、「入院対象を重症化の恐れが高い人などに限る」という方針を示した。これに対し怒りを覚えたインターパーク呼吸器内科クリニックの倉持仁医師は、菅総理は「至急、おやめになった方がいい」と発言し、これがマスコミなどにも取り上げられたという。倉持医師は、朝日新聞（2021b）のインタビュー記事で、次のように述べている。「ある患者さんに入院が必要かどうかは、診察した医師にしか分からない。政治が一律に線をひくことはそもそもできません。官邸主導が強まり、現場のニーズを分かっていない人たちが政策をつくっているのではないのでしょうか。」



現場の話に耳を貸さないし、見てもいない。だから、現実合わない政策が出てくるのだと感じます。」（太字、筆者による強調）。

この現場医師の指摘を待つまでもなく、実際のところ、菅総理の政治姿勢は、どうなっていたのだろう。はっきり見えてくることの一つは、菅総理の政治への、極めて個人的な（しかし、また日本的でもある）信念と関連しているとは言えないだろうか。端的にいうと、政治家が現場の実態を軽くみるか、場合によっては無視し、逆に世間、広く国民全体ではなく、政治家個人としての自分の意見、政策、人事、目標を強く全面に押し出して、自分の政策を自信を持って進めるべきであり、そうすれば、そのうち国民も理解してついてくるであろう、という楽観的視点があまりにも強く反映されていたのが、菅総理ではないだろうか。日本には、古来から3匹の猿が両手でそれぞれ目、耳、口を隠している意匠があり、「見ざる、聞かざる、言わざる」を示す叡智とされている。菅総理は、実はこの叡智を逆手に取り、国民の言うことは見ない、聞かない、自分の本心も言わない、といったように、多くの国民にとって具体性に欠ける政治を行って来たとも言えないだろうか。

そして、それは実は、国政だけに限ったものではなくなっている。地方選挙でも、菅総理を首班とする自民党政権はいくつかの強烈な痛手を追ってきている。2021年の夏までに限って見ても、実は多くの地方選挙で、自民党が敗北を重ねている実態が見えてくる（朝日新聞 f）。その例を挙げておこう。

- 1月24日、山形県知事選挙、推薦候補が敗れる。
- 3月21日、千葉県知事選挙、推薦候補が大敗をする。
- 4月25日、北海道2区補欠選挙、候補者を擁立できず。
- 4月25日、長野選挙区補欠選挙、公認候補が破れる。
- 4月25日、名古屋市長選挙、推薦候補が敗れる。
- 6月20日、静岡県知事選挙、推薦候補が敗れる。
- 7月4日、東京都議会選挙、自民、公明での過半数に届かず。
- 8月22日、横浜市長選挙、菅総理も支援した候補が敗れる。

ご覧の通り、多くの地方選挙で、今までになかったような確率で、自民党は連敗を重ねているのである。このうち、2021年8月に行われた横浜市長選挙について見てみよう。この市長選挙では、多くの候補者（元知事、現市長、国会議員、元長野県知事など）の中で、横浜市立大学でウイルス研究などを行っていた山中竹春氏が、市長選に名乗りを上げた。その結果、山中氏が何と50万票も獲得し、横浜市長選に当選を果たしたのである（朝日新聞 c、8月22日）。次点の元国家公安委員長であった自民党の小此木八郎に18万票もの違いを見せつけた大差での勝利である。

特に、小此木氏の父親は、小此木彦三郎元通産大臣であり、菅総理が政治家になる前に秘書として使えた関係である。菅総理も、その経歴もあり、小此木氏への支援を明確にした選挙であったが、その小此木氏の敗北は、菅総理にも極めて不安な要素になったと言える。選挙では、カジノを含む総合型リゾート誘致をめぐる攻防などももちろんあったが、もっとも大きなポイントは、感染が爆発的に広がる新型コロナウイルスに関するコロナ専門家として名乗りを上げた山中氏が、他の候補者を抑えて、圧倒的な優位に立てたことにある。コロナ対応への不満から国民には内閣への支持が低迷しており、これがもっとも大きな要因となったといえるだろう。

さらに、こういった総理の、言葉に対する姿勢は、新聞記事でも取り上げられるようになっていく。首相は2021年8月25日の記者会見で、コロナ対応に関する首相の言葉が国民に届いていないと指摘されると、神妙な面持ちで「私の言葉について厳しい指摘を頂いた。しっかり受けとめ、真摯に対応していきたい」と述べている。自民党関係者からも首相は「パフォーマンスが不得意」、「原稿を読んばかり。自分の言葉で話し方を練習して欲しい」、「会見すればするほど内閣支持率が下がる」、「説明不足のイメージが定着した」などと厳しい指摘を受けるようになっていく。産経新聞（2021a）は、政治部長の談話として、「コロナ有事においては、トップが明確な展望を示して国民に訴え、一丸となって対処するよう鼓舞する発信力、言葉の力がやはり必要だ」と述べている。プロンプター（原稿映写機）も2021年2月に入ってから使うようになったのだが、視線が定まらず、着実に使いこなしているとはいえないようだ。

産経新聞（2021b）は、2021年8月6日の広島市での平和記念式での読み飛ばしについて触れている。なんと、菅総理は式場で用意された原稿の一部（原稿の一枚）を完全にすっ飛ばして挨拶をしてしまったという。これでは、単純なミスを超えて、極めてフォーマルな平和式典そのものを汚すことにもなりかねない。「核兵器のない世界の実現」、我が国が「唯一の戦争被爆国」であるといった部分が、全く総理の言葉から抜け落ちたていたということになる。とても残念な失態だと言える。

さらに、毎日新聞（2021b）は、菅総理が「仮定のことは話さない」としばしば会見で発言することを取り上げて、流通経済大学の龍崎孝教授（ジャーナリズム論）の厳しいコメントを掲載している。龍崎氏によると、「総理大臣として『失格』レベルの発言です」と述べ、さらに「国民の不安を取り除き、未来に希望を持たせるのが政治家の役割です。『仮定のことを話さない』というのはつまり、『私は未来のことは一切話さない』と表明しているのと同じ。一般市民を突き放した極めて冷たい言葉です」と評している。

朝日新聞（2021d）、読売新聞（2021a）は、7月30日の夕刻、政府の新型感染に関する政府の対策分科会で尾身会長が次のように、首相に直訴したという：「国民の気持ちの寄り添うようなメッセージを出していただきたい」。しかしながら、官邸から聞こえてくるのは、「総理のぶら下がり取材などの発言は秘書官が作る。自分の言葉で語らないので、国民に響くわけがない」。こういったコメントは、実は限られたマスコミ、新聞などではなく、多くのメディアで共有されつつあるといいだろう。朝日新聞（2021g）は、ジャーナリストの江川紹子のコメントとして、菅総理と安倍総理には共通した問題があったという。それは「自分が良かれと思うことを、トップダウンでしゃにむにやる発想では、コロナ対策のような、科学的な対応と複雑な危機管理が必要な問題には通用しない」という指摘だ。さらに、「トップダウンの発想だけでは、コロナのような国民の協力が不可欠な事態には対応できません」とも述べている。

こういった政治、特に菅総理に対する不満は、全国紙だけでなく、地方紙からも読み取ることができる。例えば、九州を中心とする西日本新聞（2021a）は、次のようなコメントを記事にしている。そこでは、二階幹事長が早々と菅総理支持を表明しているにも関わらず、その二階派の議員懇談会（二階氏は出席せず）で「首相では衆院選を戦えない」「菅はダメだ」「（首相支持を）派閥が強制はできない。俺は強制されない」といった声が、若手の議員を中心として広まっていたと言う。京都新聞（2021b）は、日本学術会議で任命が認められなかった立命館大学の松宮教授の次のような指摘を掲載している：「日本学術会議会員の任命拒否と政府のコロナ禍対策の失敗は同根の問題。それは専門家の意見を軽視し、**耳の痛い話を聞こうとしない首相の態度にある。**」（太字、筆者による強調）。

もっとも、繰り返すが、菅総理は就任当初（2020年9月）はかなり支持率の高かった首相だ。特に、自助、共助、公助をもとにして、縦割り行政、既得権益、悪しき前例主義の打破を目指すものであり、それなりの評価を受けていたと言える。また脱炭素化、グリーン社会、携帯料金の値下げなど、多くの国民が支持した政策も見られた。しかしながら、国民に通じる、わかりやすい言葉の使用となると、大きく意見の分かれるところだと言えるだろう。例えば、菅総理が総裁選への不出馬を表明した時、同じ神奈川選出の小泉進次郎氏は、菅政権を肯定的に評価し、「批判されてばかりだったが、1年間でこんなに仕事をした政権はない」と述べている（夕刊フジ2021、産経新聞2021c）。

さて、それでは、この菅総理の言葉の使い方、特に明確な言葉を選べる、できるだけ曖昧さを貫く、質問、原稿を無視する（したかのよう）、国民の疑問にまともに答えようとしない（ように見える）という言語スタイルは、どのように解釈できるだろうか。単に不注意、散漫であるという以外に、文化的、社会的にもう少し広い視点で、言語学的視点から考え直すことができないだろうか。日本新聞協会賞を受賞したジャーナリストの鮫島浩は、次のように述べている：「私は菅首相を当選2回の若手だった2003年当時から取材してきたが、苦境に立つほど強気一辺倒で押してくるタイプの政治家である」（プレジデント・オンライン2021）。果たして、その強気一辺倒はどこまで通じたのだろうか。

2. 菅総理の言語

菅総理の言語を使った表現については、数多くの事例を挙げることができる。この章では、官邸での記者会見を二



つ取り上げてみよう。

まず一つ目は、2021年1月7日において行われた緊急事態宣言の発出（東京、千葉、埼玉、神奈川）に関する会見である。ここでは、菅総理が頻繁に使った「仮定」に関する表現について考えてみよう。菅総理は、官房長官時代から「仮定の質問には答えない」という、いわば『仮定おじさん』とまで揶揄されるくらいに、この「仮定」に関する表現をこれでもかというくらいに、頻繁に使う傾向があるようだ。もちろん、それはそれで問題はないとも言えるのだが、国の方向性、大切な未来、将来像をわかりやすく国民に語る国のリーダー、総理としては、単純に「自分に都合が悪いことには答えない」というだけで、「仮定のことには答えない」では済まされなくなる。できるだけ、正確に、聞き手に向かって、仮定のこと（さえ）も、自分の国の方向性、行き先を示す必要があるからだ。

2.1. 「仮定のこと」

総理官邸での記者会見（首相官邸、2021b）では、菅総理は、自らの用意した会見内容（もちろん、あらかじめ準備されたもの）が終わり、担当記者たちからの質問に答える場面を少し見てみることにする。何人かの記者が質問に立つが、そのうちフジテレビの記者が、次のような質問を菅総理に投げかける。

記者：緊急事態宣言に関連してお聞きします。先ほど、東京都が今日最多を更新したというお話がありましたが、東京都以外の各地でも最多の感染者数を更新している状況です。中でも、名古屋、大阪の知事は宣言の必要性に言及していますが、現時点の首相の考え方を教えてください。また、現在のこの宣言を仮に延長する場合、今回と同様に一ヶ月程度の延長を想定しているのか、併せてお願いします。

質問の内容は、2点である。一つは、今回は東京、千葉、埼玉、神奈川に宣言が出されているが、実は感染者はこれ以外の地域でも今までになかった規模で増大している、つまり他の県にも広めるべきではないかという点が一つである。さらに、もう一点は、宣言期間が一ヶ月と限定されているが、それで果たしていいのか、むしろ宣言を延長して、長期的な視点（例えば数ヶ月）で捉えるべきではないか、という点である。いずれも、国民の目線から見て、理にかなった質問だと言える。実際、前首相の安倍総理の場合、最初の宣言ということもあり、全国一律に緊急事態を発出・そして延長したことも、2020年、実際あったわけである。さらに、果たして、一ヶ月程度の期間で、本当に効果があるのかどうか、大いに疑問な点だとも言える。さて、菅総理はどう答えているであろうか。国民の不安、感情に寄り添うように答えているであろうか。以下に、少し長くなるが、その発言を引用してみよう。

菅総理：まず、この一都三県の感染者の半分以上が30代以下の若い人たち、そういう中で飲み会の自粛や不要不急の外出の自粛、こうしたものをお願いしていますし、マスクの着用、手洗いの徹底、三密の回避、こうした基本的な考え方をまずは徹底していきたいというふうに思います。大阪、愛知の県でありますけれども、これにつきましては、この緊急事態宣言に準ずる対応をすることができるようになっていますので、状況を見ながら、そこはしっかりと対応していきたいというふうに思います。それと、もしできなければ一ヶ月ということでありましたけれども、仮定のことについては、私からは答えは控えさせていただきたい。とにかく一ヶ月で、何としても感染拡大防止をしたい、そういう思いで取り組んでいきたい、こういうふうに思います。

一見して、ちゃんと答えているようにも見えるが、実はそうではない。まず、30代以下の若い人たちの感染が増えている。さらに、マスク、手洗い、三密（密閉、密集、密接）などの対策は、もうずっと言われていることであり、年齢、対策などは、なんら新規の情報ではない。こう言った答えは、質問者からの問いと全く関係のないものであり、全く答えになっていない。

さらに、大阪、愛知などについては、「緊急事態宣言に準ずる対応」をする、となっているが、それでは具体的にどういう対応なのか、何ら説明がなされていない。「緊急事態宣言」と同じなのか、あるいは違うとすれば、どこがどういうふうに違うのか、対応の仕方、中身について、何も触れられていない。これでは、質問者、国民は、煙に巻

かれたようで、新情報は一切ないと言ってもいいだろう。加えて、菅総理は「しっかりと対応していきたい」と答えており、特に「しっかりと」を繰り返すことによって、自分の努力を最大限に盛り上げ、いわば緊張感を極力高め、一種の「精神論」で難局を乗り切ろうとしているかのようでもある。

さらに、極めつけは、「仮定のことについては、私からは答えは控えさせていただきたい」という表現である。これでは、全く質問に答えているとは言えない。どういう危険な、さらに厳しい状況が待っているのか、表面上の「三密」云々だけではなく、もっと具体的にどこに気をつけて、どういう対応をし、何を今なすべきなのか、今後どうなるのか、それが、「全く示されていない」。これでは、菅総理は答えたくないの、その質問には「答えません」「コメントはなしです」と言っているに等しい。新型コロナウイルス感染については、おそらく国民の多くが、心配、不安を抱えており、今後の見通しなどもっと具体的に、ストーリー、実際例、などなどを語って欲しいところであり、できるだけ、国民はそれらを詳しく知りたいはずだ。それなのに、「仮定」のことについては、何も言えない、というのは首相としての責任を放棄していると言ってもいいだろう（毎日新聞bを参照）。少なくとも具体的な感染者の数字、病院の逼迫状況、医療体制の現状と今後の予想される課題などについて、日ごとに移り変わる各県別の地域、現状など、もう少し突っ込んだ内容をわかりやすく示すべきところである。繰り返すが、菅総理から出る言葉は、「私からは答えは控えさせていただきたい」だけである。

さらに、注目したいのは、菅総理には、「ふうに思います」、「こういうように思います」という表現が文末で頻繁に使われているという点である。これは丁寧さという観点から考えると、一見、親切に几帳面に話しているようにも見えるが、その反面、迫力、断定性に欠ける表現であり、一国の首相としての強い決意、自信、観念、やる気に満ちた答えとはなっていないようである。いわば、「擬似的」な丁寧さを作り出しているだけとも言えるだろう。「と思います」、「控えます」のように、もっと断定的に、きっぱりと信念を持って言える言葉を使うべきだともいえる。自分の保身だけを考え、責任を回避するスタイルともいえるだろう。なお、こういった「仮定」のことには答えないという菅総理のスタイルは、他の新聞、雑誌などでも取り上げられている（女性自身 2021、朝日新聞 2021a など）。

2.2. ぶら下がり

次に、菅総理の言語に見られる特徴の2点目として、別の記者会見の様子を見てみよう。概して、菅総理には、国民の聞きたいこと、国民が知りたいことに、真正面に真摯に向きあって、できるだけわかりやすく、考えられる限りの誠実さで答えていく、という姿勢に欠けているようだ。これをもっとも、如実に示した例として、内閣広報官であった山田真紀子氏のケースを上げることができる。ジェンダーに関する日本の国際的地位ということで、「世界経済フォーラム」のまとめたジェンダーギャップ指標ランキングによると、日本は156カ国中、120位と低迷している（World Economic Forum 2021）。世界的に極めてランキングが低い国ということになる。そういった中で、山田氏は十分に活躍している官僚の一人のようだ。女性として初めての正式な内閣広報官として、官邸での総理の記者会見を司会、進行をしていた人物で、極めて優秀な官僚だと言えるだろう。しかし、内閣審議官当時に、放送事業会社から高額接待を受けていたということで、最終的に辞任に追い込まれた官僚でもある。その辞任の際の、総理の記者会見（首相官邸、2021a）では、いわゆる「ぶら下がり」会見も予定されていたのだが、急遽、中止となり、定例の官邸での記者会見となった場面である（Azuma 2021）。記者と菅総理の会見の実際の模様を、いくつか以下に挙げてみる。

記者：正式な記者会見と、こういったぶら下がりの取材の違いとは、どういう風にお考え、何が一番いいと思いますか？

フォーマルな記者会見と、いわゆる「ぶら下がり」（インフォーマルで、時には歩きながら行われる会見）について、丁寧に、しかし明確に質問した記者について、総理はどう答えているであろうか。わかりやすく、しかし、知恵を絞って、できるだけ正確に答えているであろうか。菅総理の答えを見てみよう。



菅総理：それは、皆さんが考えることじゃないですか。

端的に答えているのだが、かつての官房長官時代のスタイルそのまま、まともにわかりやすく相手に答える、という風にはなっていない。というよりも、全く、「そもそも何も答えていない」、といってもいい。

さらに、別な記者が追加で質問を投げかけている。

記者：総理。すいません。今度の会見では、最後まで、質問等、打ち切りなく、お答えいただけるのでしょうか？

質問では、往々にして時間などの制限もあり、短い質問で打ち切りで、記者会見が終わってしまうケースが多くある。質問した記者は、根本的な疑問、質問にはちゃんと総理が答えてくれるのかどうか、念を押している（押そうとしている）場面である。総理は、どう返答しただろうか。以下に見てみよう。

総理：いや、私も時間がありませんから。でも大体、皆さん、出尽くしているんじゃないでしょうか？先ほどから、同じ質問ばかりじゃないでしょうか。よろしいでしょうか。

菅総理としては、同じ質問を繰り返されているので、もう時間もないし、これで終わりにしたい、ということになるだろう。しかしながら、肝心の質問（記者会見とぶら下がりの違い？）などには、全く答えようとしない、それで国民、聞き手に説明をし、納得させることができるだろうか。さらに、「同じ質問ばかりじゃないでしょうか」と言っているが、これは、総理が記者たちの肝心の質問に繰り返し、全く答えていないからである。それゆえ、記者たちは質問を繰り返している訳で、もし総理が最初から質問に誠実に答えれば、そもそも質問の繰り返しはなくなるわけである。

もちろん、自民党内には、女性活用、高齢者社会などに真摯に対応しようとしている政治家も多くいる。例えば、元官房長官、また元厚生労働大臣を経験し、国際派でもある塩崎恭久などは、党内の政治制度改革はもとより、高齢化社会において老後介護、保険、コロナ対策などについて論陣を展開している政治家の一人だ（日刊ゲンダイ 2021）。しかし、こういった論争、主張は、残念ながら菅総理からはあまり聞こえてこないようだ。

菅総理の発話スタイルとは、総じて、自分の話したいことは話すが、相手が聞きたいことには（全く）答えない、という「自分中心」の会話スタイルそのものと言えないだろうか。相手中心ではなく、話し手中心の会話スタイルと言える。これでは、かつての官房長官時代ではなく、総理となった時代には、多くの国民に説明、納得、さらには根本的に理解させることは難しくなるだろう。菅総理は就任時はかなりの支持率を誇っていたのだが、残念ながら、それはあまり長く続いたとは言えない。就任時は7割近い支持率だったのだが、辞任の頃には3割台にまで落ち込んでしまっている。さて、これはどこに問題があるのだろうか。海外の研究者の主張を基にしながら、広く言語学的に考察してみることにしよう。

3. スピーチ・スタイル

ここでは、アメリカのジョージタウン大学で、広く社会言語学を教えているタネン（Tannen, 1986, 1990, 2007, 2020, 2021）の主張点を基にして、言語のスタイル、表現、話し方などについて、考えてみよう。タネンは、特に男女の性差および会話の流れ、実態に関する言語研究（Genderlect）を多く行っている研究者の一人だ。

その出発点として、Gumperz（1982）の主張する conversational involvement 「会話での関係性」に着目する。Gumperz（1982）は、Once involved in a conversation, both speaker and hearer must actively respond to what transpires by signaling involvement, either directly through words or indirectly through gestures or similar nonverbal signals（Tannen 2007:25）と主張する。さらには、Goodwin（1981）の唱える conversational engagement

「会話での関与、参加」などをもとにし、involvement を次のように定義している：An internal, even emotional connection individuals feel which binds them to other people as well as places, things, activities, ideas, memories, and words (Tannen 2007:27). そして、この関係性、繋がり、かかわり合い (involvement) は、単に受身的に与えられたものではなく、むしろ会話攻略、戦略の上で、聞き手、話し手が協力して「達成」させられるものである (an achievement in conversational interaction) と考える。話し手から聞き手にだけ、一方的に与えられるだけのものではないのである。

さらに、会話を Bakhtin (1981) が主張するように、話し手と聞き手が共に参加する共通の生産、算出 (joint production) であり、**全ての言語はそもそも会話的** (dialogic) である、あるいは相互関係的であるとみなすことから始まると考える (太字、筆者による強調)。つまり、言語、言葉、会話において、聞き手と話し手のお互いの関わり (involvement) が言語研究の根底にあると考えるわけだ。これは、菅総理の言語仕様を考える上で、大いに参考になりそうだ。

3.1. ラポートとリポート

さらに、タネンが続けて主張することの一つは、私たちの言語仕様を大きく二つに分けることにある。まず一つ目は、人間関係、社会的な繋がりを重視し、会話者同士の情緒、感情を盛り上げるような、いわゆる「ラポート・トーク」(情緒トーク)と言われる要素であり、もう一つは情緒よりも新しい情報、事実を中心とする「リポート・トーク」と言われる要素である (Tannen 1990)。ちなみに、このラポート・トークは、別な言語学者のジェファースン (1988) によると、「問題のある発話」(troubles talk) とも呼ばれているもので、特に、何か自分の抱える些細な (あるいは些細でなくても)、ちょっとした心配事などを話すときによく使われる会話のことである。実際、**全ての会話は**、そもそも「問題のある発話」なのかもしれない。

そして、この二つの言語仕様のパターンを、男女の性差という観点から考えてみると、どちらかという、女性は情緒、共感に主眼をおく「ラポート・トーク」に力点を置いた会話に優れており、男性は情報を中心とした「リポート・トーク」によりその本質がある、ということになる。もちろん、これはあくまでも相対的なものであり、それぞれ個人差もあり、曖昧な面も多くある。しかし、男女差でいうと、この情緒か情報か、という観点から見ると、確かに大まかな違い、つまり女性はラポート、男性はリポートに近いという言語的特徴があるようだ。

さらに、ラポート・トークという点で見ると、どうも女性はお互いの感情、情緒がメインであるため、お互いの共感というのを高め合うような会話になりがちだとも言えるだろう。例えば、電話で会話をしている時など、女性同士の会話では、特に新しい情報がなくとも、お互いの気持ち、感情を分かり合い、共感を高めるような、どちらかという、時間の長い会話をする傾向が、概して、男性よりも女性の方に多いようにも見える。

それに対して、男性同士の会話では、新しい情報、相手に新規に伝えたい事実などが無い場合は、会話は比較的短くなり、あるいは (女性から見て) 割と「そっけない」、短絡的な会話で終わってしまう場合も多いかもしれない。つまり、男性が会話をする場合、個人的な会話もするだろうが、それに加えて、より公的な、つまり個人関係があまり出てこないような会話、公的言語に終始しがちだということにもなるだろう。これを別な言い方でいうと、端的に言って、女性は会話は長くなる、逆に男性は短くなる、静かである、大人しい、つまらない、ということになるかもしれない。

これらのいくつかをまとめてみると、次のようになるだろう。(もちろん、例外もあるのはいうまでもない。)

女性

話す、あるいは話すすぎる
個人的で仲間内の会話
お互いの関係作りをする
話し言葉

男性

あまり話さない
公的な場面での会話
力関係の維持、失敗の回避
書き言葉



これらは、もちろん一つの傾向であり、それぞれの文化、社会で育まれてきた「会話のスタイル」と考えていだろう。男性、女性は、それぞれの会話のスタイルを前もって理解しておくことが、不必要な誤解、不理解を避けるために必要なこととなるのはいうまでもない。

最近、タネンは（1986）は、その著書である *That's not what I meant!*（副題は、*How conversational style makes or breaks relationships*）というベストセラーにもなった本で、アメリカ人の男性について、次のように述べている：One of the most common stereotypes of American men is the strong silent type（Tannen 1986: 133）。その具体的な例として、映画俳優のヘンリー・フォンダについて、次のような興味深いコメントをしているので引用しておこう。

Jack Kroll, writing about Henry Fonda on the occasion of his death, used the phrases "quiet power," "abashed silences," "combustible catanopia," and "sense of power held in check." He explained that Fonda's goal was not to let anyone see "the wheels go around," not let the "machinery" show. According to Kroll, the resulting silence was effective on stage but devastating to Fonda's family. (Tannen 1986: 133)

タネンは、さらに続けて、次のように分析を試みている。

The image of silent father is common and is often the model for the lover or husband. But what attracts us can become flypaper to which we are unhappily stuck. Many women find the strong silent type to be a lure as a lover but a lug as a husband. (Tannen 1986: 134)

女性はどちらかというと、自分の個人の意見、感情、気持ちを言葉や態度で表現しがちだが、男性は、これに反して、寡黙であり、どちらかというと沈黙を好む。これは女性にとって、恋人としては「魅力」にもなるが、家庭人として見た場合は、刺々しくなったり、イライラする元にもなったりする。もちろん、これは男女の言葉に対する特徴であり、単純にどちらがいい、悪いということにはならないであろう。それぞれの会話に関しての持って生まれた「スタイル」であり、とやかくいうことでもないかもしれない。しかし、そういった男女の「スタイル」が、もし本当だとするならば、それに対しての適切な理解を、私たちは常日頃から持つておかなければいけないということになるであろう。

そのタネンの主張を裏づけるかのような一面が、2021年のタネンの著書「*Finding My Father*」（Tannen 2021）で、わかりやすく表現され、また言語学的な解説がなされている。その一部を記しておこう。それは、1993年（当時は父親は85歳）にタネンがポーランドを訪れたこと、父親との思い出などを自作にした戯曲を読んでいる場面である。自分の傍らには両親が、その戯曲に耳を傾けている。聞き終わった後の、母親と父親の戯曲に対する受け取り方の違いが、実に如実に示されている。

When I finish reading, my mother is weeping. She hugs me, and tells me that the play is wonderful --- and I am, too. My father starts talking something else. I'm crushed. I've written a play about his life, full of his words, and he doesn't seem to care. The next day he hands me a letter in which he tells me how moved he was, and explains that he changed the subject because he didn't want to show his emotion. I'm sure he means he was afraid he'd cry. Wanting to write his feelings rather than speak them shows how strongly he feels about --- and how deeply he appreciates --- my putting his stories of his childhood into a play. (Tannen 2021, 28-29)

二つの興味深い点は、父親は、母親とは違い、自分の感情を極端にさげすむことを好まなかったということ、さらには父親は自分で相手に言葉で話すことよりもそれを手紙に書いて渡す、という方法をとっていたというところである。父親は、タネンが自分で正確に観察しているように、タネンその人と同様に、「ことば」そして「言語」に対

する類い稀なる愛情があり、読むこと、そして書くことに特に深い親愛の気持ちを示していた人のようである。

ここから見えてくることは、感情、情緒の表現について、男女ではどうも大きな違いがありそうだということである。もちろん、注意しておきたい点は、必ずしも単一的に男女の差を明確に分けることはできないということである。特に、男性でも人によっては、極めて勇敢になおかつ言語学的な細かい枠組みを駆使して、魅力的で素晴らしい、なおかつ人を強く惹きつけて離さないようなスピーチをする人もいる。

特に、公的な選挙演説などで人類史に残るかのような名演説をしてきた政治家も多くいる。その一例として、少し時間的には古くなるが、黒人の政治活動家であるジェシー・ジャクソンをあげることができるだろう。

3.2. ジェシー・ジャクソン

1984年、サンフランシスコでの民主党大会（大統領選挙戦）についての演説は、実に多くの観衆、テレビ視聴者を惹きつけ、その類いまれなる演説力は極めて高く評価されたものであった。その大演説の中身については、様々な分析、解釈が可能であろう。タネン（2007）は Talking Voices とタイトルされた著書で、いくつかの言語的特徴を、彼女が主張する最も強力な「武器」とも言える言葉、つまり「involvement strategies」という枠組みで分析している。つまり「聞き手を巻き込み、没頭させて離さなくさせるような戦略」という意味で、様々な手法を、いわば芸術的な域にまでも高めながら、言語解釈を行なっている。政治の言葉を、言語学の視点から研究、解釈しているわけである。ここでは、そのうちの一つとして、「繰り返し」の用例を少し長くなるが、引用しておこう。

次は、実際のジャクソンの演説のほんの一部である。本来ならば、実際にジャクソンが大聴衆の前で、様々な声色、音質、熱狂、人々の叫び、長短の間の取り方、割れんばかりの拍手などを同時に聞きながらでないと、よく分からないのだが、ここでは言葉だけを取り上げることにする。

Workers,
you fight for fair wages,
You are right,
But your patch labor
is not big enough.
Women,
you seek comparable worth and pay equity.
You are right.
But your patch
is not big enough.
Women,
mothers,
who seek Head Start,
and day-care,
and pre-natal care,
on the front side of life,
rather than jail care and welfare
on the back side of life,
You're RIGHT,
but your patch
is not big enough.
Students,
you seek scholarships.



You're right,
 but your patch is not big enough,
 Blacks and Hispanics, when we fight
 for civil rights,
 we are right,
 but our patch is not big enough.
 Gays and lesbians,
 when you fight
 against discrimination,
 and a cure for AIDS,
 you are right,
 But your patch
 is not big enough. (Tannen, 2007, 179-180)

興味深い点がいくつか浮かんでくるが、その一つは同じような言葉が、なんども繰り返されて、それが高揚感を増していったところだろう。例えば、「労働者」が適切な賃金を求めて戦う。「それはそのとおりだ」。しかし、それを支える力、中身が足りない、そして「挫折」してしまう。Workers, you are right, but your patch labor is not big enough といった三つの表現が出てきて、それが色々な職業について、音韻を踏むような形で、繰り返されて行く。それぞれの表現が、一つのメタファー（patchwork metaphor など）となっているわけである。

例えば、「女性」が平等、同じ賃金を求めて戦う。「それはそのとおりだ」。正しいアプローチだ。しかし、実態が伴わない、サポートする組織もない。従って、何も解決しなく、最後に「挫折」してしまう。ここでも、women, you are right, but your patch is not big enough といった言葉が繰り返される。そしてこの繰り返しのパターン、メタファーが、色々な職業とともに広がって、重層的にその意味を深め、幅をもたせて増幅していく。一つの職業ではなく、およそあらゆる階級、職種（学生、黒人、ヒスパニック、ゲイ、レズビアンなどなど）で、「僅かながらの希望」、しかし「残念ながら不正」、そしてその結果、もたらされる「失態」、といったパターンが繰り返されて行くのである。ポイントは、同じ言葉を次から次と、繰り返す、そしてそれは決して「飽きもせず繰り返す」ということでは全くない。逆に、繰り返しそのものが、事の重大さ、不正、不幸をあぶり出して行き、聞き手に「共感」を作り上げて行く。まさに「惹きつけ」「抱き込み」の手法（involvement strategies）そのものである。こういった、いわば繰り返しの技法、音韻の表現などが、演説を引きつけ、聴衆を魅惑し、虜にし、さらに熱狂へと持ち上げていくわけだ。

このほかに、望ましい、人を引き付けるような演説の要素としては、演説の中に「会話」の要素を頻繁に取り入れる、さらに抽象的ではなく、具体的にできるだけ「詳細」に語る、わかりやすい「イメージしやすい」言葉を使う、受け身形を避ける、名詞形を避けるなどなど、あげることもできるだろう。例えば、「名詞形」でいうと、具体的には、「言語習得」といった名詞形よりは、「言葉を学習する」といった動詞形にしたほうが、聞き手にはるかに受け入れられやすいことになる。ちなみにタネン（2007）の Talking Voices は、サブタイトルとして、Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse となっているのだが、著者は別なサブタイトルを考えていたようだ。それは、Repetition, Dialogue, and Details in Conversational and Literary Discourse であったという（Tannen 2020, 174）。イメージしやすい言葉（Imagery）という代わりに、もっとわかりやすく「詳細」（Details）に語るということとを、「繰り返し」「会話」とともに強調したかったのだと言える。

また、話し言葉だけでなく、戯曲、物語などといったものにも広めたかったとも言えるだろう。実際、ジャクソンの演説は、当然ながら予め用意された原稿、つまり書き言葉に基づいたものであり、まさに話し言葉でもあるが、それは書き言葉に頼ったものでもあったわけである。

ここまで、広くタネンを中心としながら、社会言語学の変遷を見てきて、菅総理について何がいえるだろうか。いくつか考えられるが、それをまとめてみると、お互いにダブっているところもあるだろうが、おおよそ、次のように

なる。

- (1) 菅総理は、相手との心理的関係性を作り上げ、維持し、さらに高めるといった手法、つまり「引き込み」「巻き込み」の手法 (involvement strategies) が至って少ない、ということだ。例えば、「繰り返し」、「会話性」、「詳細さ」といった要素が驚くほど少ない、あるいは全くないといってもいいくらいだ、ということになる。残念ながら、ジャクソン氏のような感動的な演説はできないようだ。
- (2) 菅総理は、情報、事実をできるだけ伝えようとする（特に官房長官時代は特にそう）、つまりレポート・トークは（少し）できる。しかし、相手、聞き手との感情、情緒、共感を作り出し、高めるというレポート・トークが苦手というか、ほとんどできていない、ということになる。
- (3) 菅総理は、自分の意見、政策を語ることは得意だが（多くの政治家と同様に）、相手の意見を真摯に受け止め、そして文化的な適切さを持って反応していくというのが不得意だといえる。つまり、「自分中心」のスタイルであり、「聞き手中心」のスタイルになっていないということになる。
- (4) 菅総理は、レポート・トークが得意で、公的な場面で、適切な頻度で話せるようだが、私的な、個人間の会話、つながりの構築は苦手である、ということになる。
- (5) 菅総理は、男性・女性のスタイルで考えると、どちらかというと男性的で、あまり喋らず、しゃべるとしても、自分の力関係の維持、保身、そして自分の責任、失敗の回避などを主眼としている。個人的で仲間内の共感、仲間作り（女性的）はどちらかというと苦手、ということになる。

どうだろうか。結局のところ、菅総理、実は私たちが望むほどには、レポート・トークもできないし、どちらかというと自分中心で、自分の保身に注目し、巻き込みの手法 (involvement strategies) をあまり持たない首相であった、ということになる。特に、この巻き込みの欠如ということは、政治家にとって正に致命的なものである。聞き手、聴衆を引きつけ、巻き込むことができなくて、どうして自民党がキャッチコピーとして主張して来た『国民のために働く』内閣ができるだろうか？

4. 情報と情緒

直接、「結論」を言わない、あるいは言うのを避ける、さらには、あとで問題になるかもしれない「結論」はとにかくできるだけ回避し、何事もなかったかのようにして、自分の権威、能力を維持する（しようとする）といったスタイルはどこからくるのだろうか。菅総理だけのものだろうか。日本文化の発展の中で、どのように位置づけられるのだろうか。

4.1. 役人

さまざまな観点、味方があるであろうが、ここでは、歴史小説家の司馬遼太郎（2003）の意見を見てみよう。司馬は、このスタイルは実は根が深いもので、かなり以前から存在していたのではないだろうかと言っている。それも、戦後の首相たちだけと言うよりは、実は、江戸時代後期、幕末の混迷とした政治の流れの中にさえ、見られるものだという。特に、当時の攘夷運動の中で、長州藩（現在の山口県）が外国艦隊（アメリカ、イギリス、フランス、オランダ）と戦争に及び、あっけなく敗退した時の敗戦交渉（1864年）について、次のように記している。

第一回目の会合で、長州藩代表として参加していた高杉晋作（会議では「宍戸刑馬」という名前だが）などが、第二回目の会合では欠席していたと言う。理由を当時のイギリス代表のクーパー提督やアーネスト・サトー通訳官たちが問い詰めると、「実は兩人とも病気で」と藩の担当者の毛利登人は答えたと言う（実は、高杉たちは事情があり、いなくなっていたのだが）。これに対し、イギリス代表は、「これは役人にすぎん」と返答したと言う。ここでいう役人の意味だが、それは「極度に事なかれで、何事も自分の責任で決定しながらず、ばくぜんと、「上司」ということばをつかい、「上司の命令であるから」といって、明快な答えを回避し、あとはヤクニン特有の魚のような無表情に



なる」（司馬 2003、223、太字は筆者による強調）人のことである。

さらに、司馬は、役人の特徴を「一国一藩の安危よりも自分の保身から物事を思考し、大事を決めるときは必ず会議をし、すべての責任は「会議」がとるという建前をとり、責任を問われれば、「自分一個はそうはおもっていないが、会議でそうきまったことだから」という理屈をつかって責任の所在を蒸発させてしまう世界である」（司馬 2003、229、太字は筆者による強調）と述べている。この役人の特徴、実は維新戦争以降（あるいはそれ以前からも）、日本文化の中で、粛々と受け継がれてきた「文化の縮図」とも言えないだろうか。

最終的に、損得勘定に重きを置き、自分の保身、権威の意地を最優先にする。大きなことは、とにかく自分一人で決めないで、「会議」体制をとり、自分の位置、権威をできるだけ少なく見せようと努力する、うまくいったときは、自分を前面に出すが、うまくいかないときは「会議」「仲間」の保身にすがる。もちろん、首相は役人ではない。しかし、どこかにこの役人氣質が、日本の為政者、政治的リーダーの中に刷り込まれているのではないだろうか。

4.2. ウチとソト

言語と文化を相関的につながりのあるものと見て、いわゆる「言語文化学」を提唱した人に、プリンストン大学名誉教授の牧野成一（牧野 1996）をあげることができる。この人の興味深いポイントは、日本語とアメリカ英語を比較して、「ウチ」（身内の情報）と「ソト」（自分の外の情報）という概念を使って、言語を説明しているところだ。特に、日本語ではウチとソトという違いが、英語よりもはっきりと出ているという。例えば、助詞の「が」と「は」について、その違いを「は」はウチ情報、「が」はソト情報に向いていると説明している。具体例を見てみよう。

(6) 昔、昔、おじいさんがありました。おじいさんは一人でさびしく暮らしていました。

(7) 人間は考える葦だ。（パスカル）

(6) では、最初の「おじいさん」は、初めて出てきた言葉、情報、つまりソト化した情報なので、「が」が使われている。しかし、二つ目の「おじいさん」は、一度、すぐ前に出てきた情報なので、いわば身内の情報、ウチ化した情報となり、「は」となっている。(7)を見てみよう。ここでは、「人間」は、パスカルの普遍的な言葉だが、みんなに知られている既知の情報つまり、みんな「人間」についてその種族として既に知っている情報、つまりウチ化した情報となっており、「は」が使われている。

それでは、次のケース、つまり、(8a)と(8b)の会話を見てみよう。

(8a) どれがあなたのコートですか。

(8b) これが私のコートです。

(8a)では、「どれ」について、もちろん指している事物がわからない、つまり未知のソト化した情報なので、「が」を使っている。そしてそれに対する答え(8b)も、聞き手にとっては初めての情報、つまりソト化した情報（今までに知らなかったもの）なので、「が」が使われていることになる。そして、こういった「は」と「が」の違いは、もちろん英語には存在していない。（そもそも、英語には、「は」と「が」にあたる助詞は存在していない。）牧野は、これ以外に、時制、敬語、「の」「こと」などの例も示しながら、ウチとソトという概念を説明している。

さらに、もっと興味深いことに、牧野は、鈴木（1995）が主張するように、ウチとソトの違いだけに固執するのではなく、世界言語という視点から考えると、「日本人はソト向きの日本語に自信を持つことが必要だと思います」（牧野 1996：182）と述べているところだ。さらに、「日本が経済大国になり、ビジネスマン、就学生、労働者などの外国人が日本に長期滞在している現在、日本語は日本人の手を離れて存在するのだという自覚と、それに基づく新しい日本語教授法への思索の時にきているのではないか」（牧野 1996：183）とも述べている。

2021年の夏、アフガニスタン空港近くで、過激派組織「イスラム国」による自爆テロで、米兵13人（60人以上の

アフガニスタン人も)が死亡したというニュースが、全米に伝わった。これを受けて、2021年8月26日、バイデン大統領はホワイトハウスから国民に向けて次のように演説をしている。バイデン氏という、オバマ大統領(2009年-2017年)の期間にアメリカ副大統領を務めた政治家だ。スピーチに関しては、オバマ大統領ほどには評判は高くないようだ。しかしながら、短い演説だが、アメリカ大統領らしい、素晴らしい演説をしている。その一部を見てみよう(Japan Times 2021)。実に歴然とした、力強い言葉で、文節ごとに、極めて重要なポーズ、間合いを、これでもかというくらいに適切に、適量に配置しながらの、感銘的な発言であった(カッコ内はポーズの秒数)。

To those of you who carried out this attack (5秒)、, as well as anyone who wishes America harm, know this (2秒), we will not forgive (4秒), we will not forget, we will hunt you down (3秒) and make you pay.

実に勇敢で、自信に満ちた一国のリーダーの面目が見て取れるような表現だ。繰り返しの技法を使いながら、毅然として、前へ向かって強く自分を表現していく。我が国の政治リーダーにも、このような感銘的な言葉を発して、新型コロナウイルス感染であれ何であれ、大いに国民を引きつけてやまない、人間関係性を強く押し出し、巻き込む、惹きつける(involverment)、自分だけの世界に止まらない、そういう言葉を今後とも期待したいところである。

外国人だけでなく、日本人自身にとっても、「役人」の日本語から脱出し、これからの日本語は、日本国内だけで通用する言語ではなく、ソトの世界へも向けて、新しい日本語を作り上げる、そして言語の多様化を目指す、そういう時期に来ていると考えるのは、いかがだろうか。

最後になるが、社会言語学者であるタネンの著作を本稿では少し取り上げたわけだが、実は、タネンは珍しいことに、言語の専門家、学者(ジョージタウン大学の正教授)というだけではない。実は、一般市民に向けても多くの本を書いて、ベストセラーとなり、テレビ、ラジオなどにも出演している学者だ。いわば、「研究者」と「一般市民」をともに扱って、両方で成功をしている「変わった」学者だとも言える(大体の学者は、学者だけを相手にして著作をするものだ)。ここから言えることは、あくまでも一つの可能性だが、これからは、自分のウチの言語(学者語!)だけでなく、自分のソトに住む人々(一般人)にも向けて、わかりやすく、端的に、的を得た説明、解説(一般語?)をする、つまり、ウチだけでなく、ソトにも向けた言語、ウチとソトがともに使えるような専門家も、(無理かもしれないが)少しは必要になってくるといえるかもしれない。参考までに、タネン(Tannen 2020: 179)の次のことばを記しておこう。

Whatever the reason I was driven to, I feel privileged to have had the opportunity to speak to and write for **both academic and general audiences**. And experiencing the ways that doing so have resembled and differed from each other, has deepened my understanding of how language works, which has been my goal from the beginning and still is. (太字は筆者による強調)

ウチ(学者)だけでなく、ソト(一般人)にも向けた言葉を聴衆に向けて発することが、言葉への理解を深めてくれる、ということになるわけだ。一つの示唆を与えてくれる表現だといえよう。

参考文献

日本語:

朝日新聞(2021a)「仮定の質問には答えない菅首相 東京五輪は別」2021年8月12日アクセス、

< <https://digital.asahi.com/articles/ASP1Q560KP1PULZU002.html> >

朝日新聞(2021b)「「首相やめろ」発言した理由 倉持医師から政治への警告」2021年8月12日アクセス、

< https://digital.asahi.com/articles/ASP8C3PKRP86PTIL02H.html?iref=com_rnavi_arank_nr04 >。長富由希子

朝日新聞(2021c)「感染爆発化の横浜市長選、「コロナ専門家」が制す」2021年8月23日アクセス、

< <https://www.asahi.com/articles/ASP8Q54WHP8NUTIL04J.html> >。足立優心、末崎淳



- 朝日新聞（2021d）「首相『圧倒的にうまくやっている』目を背けた厳しい現実」2021年8月26日アクセス、
 < <https://www.asahi.com/articles/ASP8Q54WHP8NUTIL04J.html> >。石井純一郎、中田淳子、岡村夏樹
- 朝日新聞（2021e）「『菅さん、裸の王様になったのでは』政治学者・御厨貴さん」2021年9月4日アクセス、
 < <https://digital.asahi.com/articles/ASP936T8PP93UPQJ01P.html?requesturl=articles%2FASP936T8PP93UPQJ01P.html&pn=6> >
- 朝日新聞（2021f）「大敗、ぐらつく政権足元」2021年9月4日アクセス、
 < <https://digital.asahi.com/articles/DA3S15019740.html?unlock=1#continuehere> >
- 朝日新聞（2021g）「菅さんと安倍さんの共通点 二人の失敗から何を学ぶか 江川紹子さん」2021年9月30日アクセス、
 < https://digital.asahi.com/articles/ASP936SYBP93UPQJ009.html?iref=pc_rellink_06 >
- 朝日新聞（2021h）「岸田首相は決断型か丸投げか 1年後にわかる「人の話をよく聞く」力」2021年10月6日アクセス、
 < <https://digital.asahi.com/articles/ASPB43SV0PB1UPQJ011.html?pn=8&unlock=1#continuehere> >
- 朝日新聞（2021i）「岸田首相の「聞く力」は声を選ぶ？ 明言を避けた「耳が痛い」テーマ」2021年10月13日アクセス、
 < <https://digital.asahi.com/articles/ASPB71W3PBFUTFK00V.html> >
- 東照二（2006）「歴代首相の言語力を診断する」東京：研究社。
- 東照二（2017）「『香り』の社会言語学：人はどのように『香り』の言語化を行うのか」東京：コスモロジー研究報告、25、120－125。
- 京都新聞（2021a）「岸田氏始動 派閥に配慮の布陣では」2021年10月2日アクセス、
 < <https://news.yahoo.co.jp/articles/977151dbd988e84cb907c5561e4a30a8b7fa7cfc> >
- 京都新聞（2021b）「『学会会議問題とコロナ対策失敗は同根』大学教授が首相批判「耳痛い話聞かない」」2021年9月10日アクセス、
 < <https://nordot.app/762247917608632320> >
- 産経新聞（2021a）「ワクチン頼み『言葉』足りぬまま 政治部長・佐々木美恵」2021年9月10日アクセス、
 < <https://www.sankei.com/article/20210903-KQEQGYGRMJMHVE4O2LNICXJAXY/?926520> >
- 産経新聞（2021b）「菅首相、平和式典あいさつで読み飛ばし「唯一の戦争被爆国」部分」2021年8月6日アクセス、
 < <https://www.sankei.com/article/20210806WVCAE5DZRVIZDGGZ5TSYBSSHKKE/> >
- 産経新聞（2021c）「涙の小泉進次郎氏、首相に再選断念迫る」2021年9月7日アクセス、
 < <https://www.sankei.com/article/20210903-67YRH2CD3ZIPVEUF5ENSMSZTFI/> >
- 産経新聞（2021d）「岸田氏、露出増やし「聞く力」強調 知名度上昇期待」2021年9月25日アクセス、
 < <https://www.sankei.com/article/20210905-VUJENKS5JB2DFBSPID64GQJXM/> >
- 日刊ゲンダイ（2021）「明治以来の『平時の発想』ではコロナ禍に勝てない」2021年3月19日アクセス、
 < <https://drive.google.com/file/d/1hFh-K7YWU0CF8iDnLb-8i4ig4mcGxxSt/view> >
- 司馬遼太郎（2003）「世に棲む日々」第3巻、東京：文藝春秋。
- 女性自身（2021）「菅首相『仮定の質問には答えず』は『危機管理の基本と真逆』」2021年8月6日アクセス、
 < <https://jisin.jp/domestic/1940581/> >
- 首相官邸（2021a）「緊急事態宣言の一部解除等についての会見」2021年6月20日アクセス、
 < https://www.kantei.go.jp/jp/99_suga/statement/2021/0226kaiken.html >
- 首相官邸（2021b）「新型コロナウイルス感染症に関する菅内閣総理大臣記者会見」2021年8月20日アクセス、
 < https://www.kantei.go.jp/jp/99_suga/statement/2021/0107kaiken.html >
- 時事通信（2021）「目立つ棒読み、弱い発信力 菅首相」2021年8月26日アクセス、
 < <https://www.jiji.com/jc/article?k=2021082501057&g=pol> >
- 鈴木孝夫（1995）「日本語は国際語になりうるか：対外言語戦略論」東京：講談社。
- 竹中治堅（2006）「首相支配：日本政治の変貌」東京：中央公論新社。
- 西日本新聞（2021a）「『菅首相では戦えない』若手に危機感『党壊れるかも』自民派閥の結束に揺らぎ」2021年8月27日アクセス、
 < <https://news.yahoo.co.jp/articles/74faf5509d19b57918d10105ffca5a1b91d4eed3> >
- 西日本新聞（2021b）「安倍氏への忖度が見え隠れ、岸田氏の「聞く力」は国民に響くか」2021年9月30日アクセス、< <https://www.nishinippon.co.jp/item/n/808284/> >
- 日本経済新聞（2021a）「首相退陣、勝負をかけた三つの瞬間」2021年9月4日アクセス、
 < https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUA251H60V20C21A8000000/?n_cid=NMAIL007_20210903 >。吉野直也
- 日本経済新聞（2021b）「衆院選の勝敗ライン「与党で過半数」岸田新総裁」2021年9月29日アクセス、
 < https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUA293X80Z20C21A9000000/?n_cid=NMAIL007_20210929_Y >
- プレジデント・オンライン（2021）「河野太郎首相だけは絶対に避けたい」自民党内で「菅下ろし」が盛り上がらない根本理由」2021年9

月1日アクセス、

< <https://news.yahoo.co.jp/articles/30e9098e24fd79537a3fc165ce3a23e28d43861b?page=5> >。鯨島浩

フェルドマン・オフェル (2006)「政治心理学」京都：ミネルバ書房。

毎日新聞 (2021a)「菅首相、五輪の『辞任ジレンマ』打破できず」2021年9月10日アクセス、

< <https://mainichi.jp/articles/20210903/k00/00m/010/113000c> >

毎日新聞 (2021b)「菅首相『仮定のことは話さない』発言 真意はどこに？コロナ禍で苦しむ人に届くのか」2021年2月5日アクセス、

< <https://mainichi.jp/articles/20210202/k00/00m/010/299000c> >。金志尚

毎日新聞 (2021c)「岸田首相の所信表明 転換への踏み込み足りぬ」2021年10月9日アクセス、

< <https://mainichi.jp/articles/20211009/ddm/005/070/131000c> >

牧野成一 (1996)「ウチとソトの言語文化学」東京：アルク。

夕刊フジ (2021)「涙の進次郎氏、菅首相支持で奔走も」2021年9月5日アクセス、

< <https://news.yahoo.co.jp/articles/6fec967e44f0268ff93ccfc0840fc8c04e7d9790> >

読売新聞 (2021a)「尾身会長、菅首相に『最も危機的な状況』と直訴、、『しっかりと受け止めて対応』と応じる」2021年8月26日アクセス、

< <https://www.yomiuri.co.jp/politics/20210730-OYT1T50332/> >

読売新聞 (2021b)「自民総裁選、党員票獲得へ短期決戦、ここ数日が勝負」2021年9月20日アクセス、

< <https://www.yomiuri.co.jp/politics/20210918-OYT1T50278/> >

読売新聞 (2021c)「『期待』を『納得』にできるか 岸田内閣発足」2021年10月6日アクセス、

< <https://www.yomiuri.co.jp/politics/20211004-OYT1T50345/> >

英語：

Ackerman, Diane (1995) A Natural History of Senses. New York: Vintage Books.

Azuma, Shoji (2021) "Prime Minister Suga, Gender Equality and Rapport Speech: A Study of Speech Style," International Journal of Arts, Humanities and Social Science. Vol. 2, 6, 49-54.

Bakhtin, M. M. (1981) The Dialogic Imagination. Austin: The University of Texas Press.

Goodwin, Charles. (1981) Conversational Organization: Interaction between Speakers and Hearers. New York: Academic Press.

Gumperz, John (1982) The Discourse Strategies. Cambridge: Cambridge University Press.

Ikeda, Keiko (2009) "Audience participation through interjection," Journal of Language and Politics. Vol. 8, 1, 52-71.

Jefferson, Gail (1988) "On the sequential organization of troubles-talk in ordinary conversation," Social Problems, 35 (4), 418-441.

Japan Times (2021) "Deadly Kabul attack shakes Biden's Afghan exit strategy." 2021年8月26日アクセス、

< <https://www.japantimes.co.jp/news/2021/08/27/world/afghanistan-exit-strategy-shaken/> >

Lakoff, George (2009) The Political Mind. New York: Penguin Books.

Lim, Elvin (2008) The Anti-Intellectual Presidency. Oxford: Oxford University Press.

Maynard, Senko (1994) "Images of involvement and integrity: Rhetorical styles of a Japanese politician," Discourse and Society. Vol. 5, 2, 233-261.

Ott, Brian and Greg Dickinson (2019) The Twitter Presidency. New York: Routledge.

Tannen, Deborah (1986) That's Not What I Meant! New York: Ballantine Books.

Tannen, Deborah (1990) You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation. New York: Ballantine Books.

Tannen, Deborah (2007) Talking Voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse. Cambridge University Press.

Tannen, Deborah (2020) "Crossing over," In (Luke Plonsky, ed.) Professional Development in Applied Linguistics (165-180). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Tannen, Deborah (2021) Finding My Father. New York: Ballantine Books.

World Economic Forum (2021) "Global Gender Gap Report 2021." 2021年9月10日アクセス、< http://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2021.pdf >

付記：本稿の一部は、ユタ大学 (University of Utah, Faculty Fellow Grant) の助成を受けて行われたものである。また、毎日新聞の金志尚氏には取材でお世話になった。お礼を申し上げたい。

(あずま しょうじ 米国ユタ大学言語文化部・教授)